

DMSP の赤外線写真の原画の色彩階調写真への変換が気象庁の Phosdac を用いてテストされ、DMSP 写真の色温度の推定及び写真をデジタル・データに変換することの可能性が得られた。

9. 学術講演

3つの講演があり、講演者と題目は次の通りである。

笠原 彰 (NCAR)

“サブ・シノプティクスケール 現象の全体的解析のための有限地域微格子予報モデルの応用について”

佐々木嘉和 (オケラホマ大学)

“サブ・シノプティクスケール擾乱のデータ解析”

D.H. Lenschow (NCAR)

“大気境界層の構造の飛行機観測”

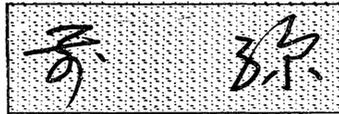
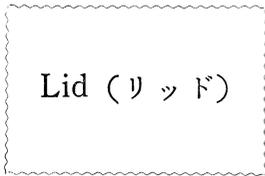
10. 会議の報告書

会議の報告書を作成する作業グループの、岸保議長は報告書の草稿を会議に提出した。会議では発行上のいくつかの修正を入れて、満場一致で採択し、この報告書を AMTEX 事務局の手でできる限り早く出版することと、すべての参加者と関係者に送付することが決定された。

11. 閉会式

須田気象研究所長が会議の閉会を宣言し、AMTEX '75を促進し実現するためのこの会議の意義を強調した。同氏は参加者全員、特に海外からの出席者に謝辞を述べ、AMTEX '75への全員の活発な協力を要望した。

以上



用語解説 (45)

朝にかけて低くなり、日中高くなるのが普通で、大気汚染の気象予測にしばしば使われる最大混合層高度 (maximum mixing depth, MMD) はリッドが一日の中でもっとも高くなったときの高度である。リッドの

大気汚染気象や境界層などの分野で近年使われている用語で、混合層の上限をいう。

大気中での地上からの熱や水蒸気などの鉛直方向の輸送は、大気の成層状態と密接な関係がある。とくに地上から 1,500 m ぐらまでの下層大気中では、地表面の放射冷却、地形の影響、海陸風の侵入、大気汚染など様々な影響で、逆転層や安定層が生じる。また地表面温度は日射による加熱昇温、放射冷却によって日変化が大きい。これに伴って地上気温の日変化は中緯度地方では、海岸付近の陸地でも 10°C 近く、内陸ではそれよりはるかに大きい。その結果、リッドの高さは地域的にも時間的にも変化が大きい。

同一地点についてみると、リッドの高さは夜間から早

場所による変化は、従来 MMD の分布を地上気温分布だけを考慮して求めてきたが、最近下層大気の成層状態の詳しい観測が行なわれるようになって、新しい知見が得られるようになった (たとえば本誌21巻 314 頁参照)。

リッドの高さを正確に知ることが大気汚染気象予報に極めて重要なことはいままでもない。そのためには現地の大気中の気温鉛直分布を観測するか、ライダーなどで直接混合層の高さを知ることができればよいことになるが、現実には多くの場合は、高層気象観測で観測された状態曲線 (わが国では9時と21時の観測) と、リッドを求めようとする地点の必要な時刻の地上気温から引いた乾燥断熱線の交点の高さを図上で求めるのがふつうに行なわれている方法である。 (河村 武)